

愛だよ。心だよ。
人生だよ。



福島 鏡

15歳で死んだ弟

弟の名前は豪と書いて、“ひでる”と読む。

昭和三十四年一月二十五日、我家の三男坊として生まれた。

昭和四十九年十月九日午後七時三十五分、腎臓癌で鹿児島大学付属病院にて永遠の眠りにつく。生まれた時から尻が少し出っ張り、我家では、唯一人足が以上なまでのガニ股だった。それに左腕の肱の関節がどういう訳か、おかしくて左腕が外側に振れていた。自分にしても次男にしてもそうであったが、ヒデもまた自分たち二人に劣らぬ腕白だった。くそ真面目な腕白だった。

癌に侵され、体が蝕まれて永遠の眠りにつくまで、その腕白から発揮される意地と根性は癌に優るとも劣らぬ程であった。

もう二度とこの世に帰ってくることはないヒデ。お前は、俺にとって誇り高き弟である。大宇宙の小さな地球に生命を受け、俺の弟として、十五年と八ヶ月と十四日間のわずかな人生ではあったけど、“ヒデ”お前は、又それも一人の人間の人生であることを教えてくれた。大宇宙から見ても、地球から見ても、日本から見ても、無名の小さな“ヒデ”でも、俺から見ればこの世の最高で最愛の弟だった。

弟が死んで間もなくしてからノートに書き記した四十数年も前の一節である。

死は、ある日突然に、真逆と思ってもよらぬ形でやってくることもある。死んだ弟は家の中では腕白でも、外では誰にも自分から言葉を売ったり手足を出すような横暴な真似は、一切したことがなかった。友達とは仲が良く、男女の分け隔てなく付き合いがあり、孤立したクラス・メートには寄り添う優しさがあつた。クラスでは何回となく級長を務め、成績も兄弟姉妹の中では一番良かった。

どうして、ヒデは死ななければならなかったのだろうか。八十歳を過ぎても夫婦喧嘩をしながら生きている両親、五十歳を過ぎても健康で生きている自分を見る時、弟の死はあまりにも不条理に思えてならない。

夫婦喧嘩は犬も食わない。自分たち五人兄弟姉妹には、子供や周りの親戚、知人がどんなに心配しても、風に吹かれたら脆く崩れる砂の如く無意味でいつになっても信頼関係を築くことの出来ない両親がいた。罵り合い、母に暴力を振るう父、若い時は毎日のように焼酎を飲む父がいた。

そんな家庭の中で、小さい頃は夫婦喧嘩を真似るように不満や気に障ることがあると、自分たちはよく兄弟姉妹喧嘩をした。しかし長男の自分は末っ子のヒデを守る以外には、取っ組み合いの喧嘩をすることはなかった。

一番上の姉が中学二年の時、末っ子のヒデが小学一年生だった。もうその頃になると兄弟姉妹喧嘩は少なくなり、父と母の夫婦喧嘩が家族を不幸に落とし入れていた。そして、自分も姉もどうして自分たちが不幸なのかを知っていた。

姉が高校を卒業して会社に就職し、自分が中学校を卒業して少年自衛官になると、不幸な我家には静かで寂しい雰囲気漂っていた。夏冬の休暇で帰省すると、ヒデだけを連れて町へ出た。二人で美味しいものを食べ、ヒデの好きなものを買ってやった。仲の悪い両親を見るだけでも末

っ子のヒデが不憫でならなかった。もう兄弟姉妹の誰もがわかっている我家の不幸を、どうして両親がわからないのか、不思議でならなかった。そして、誰もこの夫婦を説得する術を知らなかった。

やがて次男も高校を卒業して会社に就職し、家には高校に進学したばかりのヒデと父がいた。この時、あまりの夫婦仲の酷さに自分のアイデアで母方の親戚の了解を得て、母を妹と一緒に母の実家に戻してもらった。

父と二人で暮らしながら、十キロの道程を自転車で高校へ通うヒデがいた。高校へ入学して三ヶ月が経つ頃、体調不良で自転車に乗るのも困難なヒデは、ついに市内の病院に入院することになった。入院してあらゆる検査を受けても市内の病院では何の結果も出ず、ヒデは鹿児島大学付属病院へ送られた。

そこで毎日種々の検査が行われ、十日後に出された結果が腎臓癌だった。

「若いから、癌の進行が早いのです」

「癌の細胞が血管の回りにこびりつき、手術するのが大変困難です。もし手術に失敗したら、死を早めることになります」

医師の切羽詰る検査報告が、家族とは何か、両親とは何か、を未だに理解しない不幸な家族へ突きつけられた。

この時、渡米準備をしながら東京で先輩の店を手伝っていた自分は、すぐに休暇をもらって鹿児島大学付属病院へかけつけた。目の前には骨がわかるほどに痩せ細り、ベッドに仰向けになり青白い顔で天井を見つめたままのヒデがいた。もうどんな言葉も励ましも何の役にもたたないことがわかるが、何かをして上げたい気持ちだけが湧いてくる。無意味とわかってはいても、何かを伝えたくて

「ヒデ。少しでもいいから食べる。食べたなら元気が出てくるから……。俺は、もう少ししたらアメリカへ行く。ヒデも元気になったら、アメリカに來い。いいな……」

声も出ないヒデは顎を少しだけしゃくった。ヒデは、痛いとか、苦しいとか、泣き言を一切洩らさなかった。

三日間ヒデに付き添うと、

「何かあったら、知らせてくれ」

父に告げて、又東京へ戻った。ヒデの容態が良くなるとは思えないが、いつまで生きられるのかもわからなかった。しかし、そう長くないことだけがわかっていた。

鹿児島大学付属病院から帰京して二週間が経った夜。先輩の店で仕事している時に店の電話が鳴った。

「タケシ。電話だ。お父さんだぞ」

受話器を取った先輩が受話器を渡してくれた。

「あのな……。ヒデが……。ヒデが……」

「どうしたんだ、親父。ヒデが、どうしたの……」

「ヒデが……。ヒデが……。死んだ」

その夜。仕事が終わるのを黙々と待った。仕事場でも、電車の中でも、じっと耐えた。だれに

も涙を見せられなかった。中野の四畳半の古くて狭いアパートに帰り着くと、布団を敷いて、掛け布団を二枚重ねた。その中にもぐり込むと、涙がどくどくと溢れ、嗚咽は止まることはなかった。

信じられない上司。

私が書くモノは、全て私の目で見えてきた事実である。若くして世界を見てみたいと目覚めた私は、いつも日本人と世界の違いを念頭において、自分の生き方と判断を模索してきた。特に、良い事と悪いこと、善悪の判断は、自分が十五歳から十九歳を過ごした旧海軍兵学校、現在は海上自衛隊の江田島で培われた日本を愛する、人を愛する、正義を尊ぶ精神に端を発している。ゆえに、金銭的に鋭い人々から見ると、私は大変馬鹿な部類の日本人である。昭和、平成日本の政治は、一握りの政治家を除けば、世界に通用する政治家がいなかった。だから、領海や領空を侵犯されても毅然とした態度も取れず、教育は乱れ、こんなに国が歪んでも、まだ党利と私利私欲の政治家しかいない、現在の日本がある。若者と日本。これは、これからの日本にとって大変、いや、一番大切なことであると、確信する。少しでも、馬鹿な私の経験と失敗が若い日本人の役に立てば、それが私の日本人としての誇りである。

もう二十数年も前のことである。アメリカの十指に入る大都市でシェフをやっていたときに、それは起こった。

夜も八時頃。五人の日本人ビジネス・マンが来店して、八人掛けの鉄板焼テーブルに座った。外国人のウエートレスが注文を取っているそのテーブルへ、鉄板のスイッチを入れにいった。この頃の日本人ビジネス・マンの飲み物は、不思議なことに皆が皆、シーバス・リーガルだった。

ウエートレスが眼がねをかけた丸顔の一番偉いと思われる年配の日本人に飲み物の注文をきくと、隣りに座っている二番目に偉いと思われる部下に向かい、

「君は何にするかね・・・」

と聞く。

「はい。私はシーバス・リーガルにしたいと思いますが、部長は何にされますか」
すかさず部長の意向を最大限に尊重するように聞き返した。

「じゃ、ボクもシーバス・リーガルでいいよ。皆、好きなものを飲んでいいよ」

その言葉を聞いた二番目に偉い人が他の三人に向い、

「君たちは、何にする」

隣りの人が

「じゃあ、私も部長と同じもので・・・」

二番目に偉い人が次の人に聞く。

「私も部長と同じものを、お願いします」

最後に部長から最も離れた角に一人で座っている一番若い気の弱そうな人に、二番目に偉い人が聞くと、

「私も部長と同じものを、お願いします」

多分、彼は新入社員だと思うが、全身に緊張感がみなぎり、答える時の声が震えていた。

ウエートレスが注文の飲み物を出し、メニューの注文を取り始める。

「君。アプタイザーは君の任せるから、適当に注文してくれ」

二番目に偉い人が適当に見繕う。

「ディナーは、何になさいますか」

ウェイトレスが一番偉い人に聞く。

「ボクは、ステーキ・アンド・ラブスターだ」

ウェイトレスが二番目に偉い人に聞く。

「じゃ、私もステーキ・アンド・ラブスター」

三番目の人も

「私もステーキ・アンド・ラブスターで」

四番目の人も、五番目の人も、

「私もステーキ・アンド・ラブスターでお願いします」

であった。

この頃の日本人ビジネス・マンは、大なり小なり日本式雇用関係と習慣、上司と部下の関係はこんなものだった。料理の注文が入ると、ボクがこのテーブルを焼きに行く。この人たちの会社は商社なのか、それとも製造業関係の大会社なのか、部長の権力は相当なものだった。

部長の一言一言が部下の全身に脅威を与えるように響く。部長が深刻な顔つきになれば全員が姿勢を正し、部長が笑うと、全員が笑う。聞こえてくる話はたわいない仕事の話でしかないのに。

料理が終わりに近づいた時、部長が放った冗談は上司として、日本人として、常軌を逸したものだ。日本人の中には、酒が入れば、酒の席の事だからと、何を言っても何をしても許されると思っているとんでもない無責任野郎がいる。世間的に地位がある人になればなるほど、その言動は世間の模範となるべきものでなければならないのに。

部長はもう二杯目のシーバス・リーガルを飲んでいた。

「明日はワシントンD・Cだな。ところで、亀山君。コスタリカの大使とは、アポイントメントが取れているかな」

それを聞いた部長から最も離れた角で大人しく静かに下ばかりを向いて食事していた気の弱そうな亀山君と呼ばれた彼は、椅子から飛び上がるように立ち上がり、気をつけの姿勢を取り、

「部長。どうもすみません・・・」

頭がテーブルにぶち当たったのではないかと、思うほど深々と頭を下げた。

全身ががくがくと振るえ、部長を見る彼の顔は涙顔であった。右手に持っていた箸をテーブルに置き、シーバス・リーガルを口にしたら部長は、彼の顔を確と見ると、

「心配するな。ちょっと言っただけだ」

くすっと、笑い声を出して気にも止めなかった。亀山さんは

「部長。有難うございます」

軍隊の初年兵みたいな大声でお礼を言って席に着いた。

今どきこんな日本人がいるのだろうか。私は自分の目を疑った。戦国時代じゃないんだ。まして戦争中でもない。これから我々日本人は世界を相手にビジネスをやっていかなければならない。人を裏切らない。世界のどの国の人間よりも礼儀正しい日本人でなければならないのに。この横暴で自分の部下を蔑む人間性と地位に対する責任感と人間性の欠如。開いた口が塞がらない

ほど、啞然とした。

たぶん新入社員として、研修を兼ね初めて外国の地を踏んだようなその人に私は憐憫の情を感じた。